

らに委員を選出して、国語、数学、英語の各教科で中学校から高校への、いわゆる「つなぎ教材」を開発した。中学校と高校の学習内容と生徒の学力の現状、さらに各領域、単元別の指導のポイントを盛り込み、学習指導の一貫性を図ることを目的とした教師のための指導資料である。

そして三つ目が、中・高連携に実績のある他県の取り組みの視察であった。以上の取り組みの中でも、教科別の分科会、特に授業公開に参加した教師にとって新鮮な体験となったという。

「中学校と高校の先生が担当教科の指導法について話し合い、それぞれの教材を手にし、さらに授業を観るという経験はともに初めてのものです。部会後のアンケートでも、『これまで知らなかった中学（高校）の様子をかい間見ることができてよかった』という反応が多くありました」

高校の教師の立場でいえば、それまでは「これは既に中学校で学んできているはず」と思っていたものの中に、実は思い込みもあったことがわかることになる。

授業公開は中学3年と高校1年の授業を、互いに「自分が授業を行うとしたら、どんなプランで進めるか」を前もって立案したうえで参観した。

「高校側の反応としては『中学校の指導の丁寧さに感心した』というものが多くありました。中学校の授業の間の取り方やグループ討論の利用など、もちろんすべてが高校でもそのまま取り入れられるものではありませんが、あくまで生徒を主体にした、生徒を活動させる授業は、高校とは違った指導形態として参考になったようです。高校でも生徒に問いを投げかけ、考えさせるようにしているのですが、どうしても教師が引張っていく授業になることが多いですから。このほか、教科書以外に模範、OHPやOHCなどを積極的に用いていることも印象に残ったようです」

その一方で「中学校の授業の中で、もっとこういふところはしっかりと押さえておいてほしい」「知識に深まりを与えるための考える時間をもっと取った方がいいのでは」といった感想も、

高校側から出されたという。

指導ポイント 教材で明確化

つなぎ教材「サクシード」は3月に全県の中学・高校の国語、数学、英語の教師に1冊ずつ配られ、平成10年度からの教科指導に役立てられている。

「それぞれ40ページ程度の冊子ですが、中・高生への意識調査を踏まえて、生徒はどんなところが苦手で、指導上の課題・ポイントはどこになるのかを明らかにしました。さらに演習問題などの具体例を通して、指導のポイントを確認できるものをめざしています。今回の委員会活動に参加していない教師も、実際に日々の授業に使えるよう心がけて作り直しました」

扱う内容は中学校と高校のかかわりの大きい基本的なもの、数学であれば、中学の各領域を基準に、高校の数学I・

Aと関連の深い領域に絞った。

「例を挙げると、連立3元1次方程式は高校の『2次関数』の単元で初めて登場するもので、中学校では全く学習していないため、生徒がまずきやすいです。そこで、高校の教師に対しては『ここは中学校では習っていません』と注意を促し、中学校の教師に対しては『数が多少増えてもx、yといった文字を消去することは大切なので、しっかりと指導してください』と伝えています。また中学校と高校の履修単元の関連図なども作り直しました」

福島県の中・高連携の取り組みは本年度も継続される。

「1年目の反省としては、全体的に絵花的だったということです。部会にしてもつなぎ教材にしても、もっと焦点を絞ったものにした方がいいのでは、という声が多く寄せられました。会議の進め方はもっと工夫したいし、つなぎ教材についても活用状況を見ながら工夫を加えていきたいと考えています。また、委員会のメンバーの何割かは新しい方に代わることになりましたので、事業全体として経験は積み重ねながらも、1人でも多くの教師に参加してもらえればと思っています」

将来的には生活・進路指導を含めた連携の強化も視野に置いているそうだ。



福島県教育庁高等学校教育課指導主事
菅田健夫 Shigeaki Sugita

数学教諭として約20年間に渡って、福島県内の高校で教鞭を執り、平成8年度から教育庁に教壇から今度行政という県全体を見渡す役目へと立場は変わったが、「生徒の顔を思い浮かべて、生徒のために何ができるかを考えるのは同じ」と語る。